



新型コロナ感染第5波を受けて

宮崎生協病院 感染対策委員会委員長 / 医師 三宅 知里



新型コロナウイルスに振り回される日々が続いています。相手はウイルスですから変異を起こし、これまでアルファ、ベータ、ガンマ、デルタ型という重要な変異株が世界的に問題となりました。さらに、ミュー型を含む5つの注意すべき変異株について、感染力やワクチン効果への影響などの調査が行われています。また、ワクチンを接種したにも関わらず感染してしまう「ブレイクスルー感染」も注目されています。特に感染力の強いデルタ株であることや、時間が経つと中和抗体が低下していくことが、ワクチンの感染予防効果の低下に影響するようです。ワクチンの効果は中和抗体を作るだけでなく、他の免疫細胞への効果もあるため、感染予防効果がゼロになるわけではありませんし、重症化や死亡を予防することについては引き続き高い効果を認めています。しかし、当初期待されたような「ワクチン接種でコロナを収束させる」という単純なものではなくなりました。

デルタ株が主流となった今回の第5波の中で、宮崎では8月11日から県独自の緊急事態宣言が発令され、8月20日には1日の新規感染者数が過去最多の158人を記録し、8月26日にはまん延防止等重点措置の指定を受けました。

当院における第5波は、お盆明けから発熱外来を受診される方の半数弱が新型コロナ陽性と判明する異常事態で始まりました。患者さんが増えれば、自宅や宿泊施設で療養する患者さんが累積することになり、その中で急に体調悪化する人が出てきます。そのため、保健所からの依頼を受け、新型コロナ陽性患者さんの外来診療を行いました。時には酸素投与を必要とする患者さんがおられ、その日のうちに専門病院への入院が調整できない場合は当院に一泊入院し療養して頂きました。保健所の方々も当院職員も、患者さんに辛い症状の中でも少しでも安心して療養してもらいたい、絶対に自宅死を出したくないという一心でした。

希望もあります。効果が落ちるとはいえ、新型コロナワクチン接種が進んだ世代では感染が明らかに減っています。これから若い方々の接種が進めばさらに波は小さくできるでしょう。また、基礎疾患を複数持つ患者さんに対しては、重症化を予防するための抗体カクテル療法(発症して1週間以内の投与)が始まりました。重症化や亡くなる方を減らすための治療の開発が進んでいます。

私たちの生活はまだ制限の多いものですが、手洗いやマスク装着を行い、換気の悪い場所を避けることなどが感染対策に有効であることには変わりません。この生活の中で、社会的弱者と言われる人々がさらに苦境に立たされ、基礎疾患で咳などの症状がある人々が周囲の目を気にして生活しづらくなるなど、身近で苦労している方が増えていることでしょう。地域で支えあい、つながりを持ち続け、みんなでこの災害を乗り越えていきましょう。



年に1回全職員が集まって 学術運動交流集会を行っています!



宮崎生協病院を先頭に法人内の各事業所が民主医療機関連合会という社会保障制度の改善や平和を求める活動をする運動団体に加盟しています。

年に1回学術運動交流集会という法人内の全職員が日

常の取り組みを紹介したり、困った事例や感動した事例、新しい良い取り組みなどを報告書としてまとめ、お互いに発表し合う企画をおこなっています。医師・看護師だけでなく検査技師・放射線技師、理学療法士・事務・薬剤師・介護福祉士・社会福祉士・介護支援専門員・臨床工学士など全ての職種の職員が企画に参加し、学びを深め、情報を共有し、交流する大切な企画です。

2020年度、2021年度は、コロナ禍にあり、開催をどうするか検討をしましたが、感染対策に十分配慮しながら、会場に集まるだけでなく、オンラインで参加する準備も行い交流集会を開催しました。毎年30件くらいの発表が行われますが、時間の関係上、3-4か所のグループに分かれて発表を行います。一方的に発表するだけでなく、その発表に関しての意見や質問など会場参加者と発表者が意見交換を行いながら進めています。

グループに分かれて発表会をする前に、ミニ講演などを行いみんなで学習する企画も行っています。また、各グループで発表会を行ったあとは、各グループで「優秀演題」というのを選出してもらい、選出された方には図書券を差し上げるなど、参加して良かったと思えるような工夫もしています。

この学術交流集会がある日は、その夜は忘年会を行うことが恒例となっていますが、コロナ禍で2020年、2021年は忘年会は中止となりました。せっかくの全職員が集まった忘年会ができないことは残念ではありません。

早く新型コロナウイルス感染症の流行が終わってくれることを願っています。

